

企業から見たインターンシップ

パークレイズ・キャピタル

就職は人生の大きな岐路。

大学で学んだ専門性を活かせる道に進むのか、それとも新たな可能性を模索するのか。理系ナビの読者は、大きく二つの選択肢から自らの進路を選ぶことになるのだろう。

どちらの道を選ぶにせよ、この夏に行われるインターンシップは、これから何十年と続けることになる「会社での仕事」を肌で感じられるまたとないチャンス。特に後者、新しい可能性を模索したいのなら、この機会を見逃す手はない。

例えば、ほとんどの理系学生にとっては縁遠かったかもしれない金融業界。そこにはどんな会社、どんな仕事があるのだろうか。

この夏、金融業界を体験できるインターンとして、パークレイズ・キャピタルのプログラムを紹介していこう。

インターンシップは企業と学生の
「体裁ではない実際の姿」を相互理解する場



効率よく業界研究できるサマー・セッション、リアルな仕事を体験できるサマー・インターンシッププログラム

「インターンシップ」と一括りに言っても、その内容は企業によって実にさまざま。「何となく興味のある業界を幅広く見てみたい」という人には数日間で概要を学べる短期のインターンシップが向いているし、「就職先の業界はだいたい決めているからイメージとずれがないか確かめたい」という人なら数週間以上の長期のインターンに参加して実地を体験してみるのがいいだろう。

そんなニーズの違いを踏まえ、パークレイズ・キャピタルが今夏に用意しているのは2日間のサマー・セッションと1カ月以上にわたるサマー・インターンシップ・プログラムの二本立て。サマー・セッションは、投資銀行やトレーディングといったパークレイズ・キャピタルの中にあるさまざまな仕事について説明を受けた後、課題を与えられてプレゼンテーションを行うというプログラム。対してサマー・インターンシップ・プログラムでは、実際に職場に入り、リアルな仕事を体験することで外資金融機関の仕事を身体で理解できる内容になっている。「インターンシップは採用のプロセスの中で重要な役割を担うプログラムだと

考えています」と語るのはパークレイズ・キャピタル人事部長の鶴尚美氏。会社説明会から面接へと続く採用選考の過程では、企業・学生がお互いのことを理解する時間が限られてしまう。そこでじっくりと時間を掛けられる夏の時期に、インターンシップを通じて体裁ではない実際の姿をお互いに理解する。それこそパークレイズ・キャピタルがインターンシップを開く目的なのだ。鶴氏は説明している。

理系にとって未知の業界だからこそ、インターンを通じて得られるものも

「お互いに理解する」という点について言うと、パークレイズ・キャピタルのインターンシップ終了後には「業界のイメージが変わった」という感想を寄せる学生が多いそうだ。

中でも多いのは「投資銀行は限られた人しか働けない敷居の高い仕事」という参加前のイメージが、良い意味で裏切られたというもの。ほかに「外資系の金融機関といえば投資銀行やトレーディング」といった印象を持っていたが、営業やテクノロジー部門など多くの部署があることを知り、しかも想像以上に重要な役割を担っていることに驚かされたという声もある。

「例えばファイナンス部門の仕事を見ても、一般的な経理や財務の仕事もあれば、プロダクトにかかわる専門的な業務を取り扱うところもあります。このようにファイナンス部門でも『日本のお金の動き』を実感しながら働ける。それぞれの仕事に重要な役割があり、投資銀行ならではの動きを感じるものがあるわけです」

研究職などの仕事は、研究室での活動から何となくイメージできるのに対して、金融の仕事はほとんどが未知の世界。だからこそ、その扉を開けてみることで、得られる気づきが多いのだろう。

実際に中に入って初めて実感できる

人、企業文化とのマッチング

業界・会社・仕事以外に、インターンを通じて分かることといえば、人、企業文化、ではないだろうか。

就職先を決める時に「人が決め手でした」と答える理系の先輩も多いが、インターンでは実際の仕事を体験しながら、社員の働く様子を見ることができ、「就職後、どんな職場でどんな人と一緒に働くのか」をより具体的にイメージできるようにするはずだ。

パークレイズ・キャピタルのインターンに話を戻すと、人、を知るという意味

では、インターン期間中に幹部クラスの社員と話をする機会に恵まれているのも特徴の一つ。特にサマー・インターンシップ・プログラムでは、3人程度の幹部と一対一で話ができるようにスケジュールが組まれている。どのようなキャリアパスを経て現在に至ったのか、若手社員からは聞けない深みのある話が聞けるかもしれない。

また、人は多かれ少なかれ、企業文化、から影響を受けるものであるし、企業文化、は、人、によって育まれるもの。こちらでも合わせて見ておきたい。

例えばパークレイズ・キャピタルの場合、投資銀行単体としてビジネスを展開している他社が多い中、同社の母体は300年の歴史を持つ英国の銀行。「顧客からの信用を大事にする」という銀行に由来する文化が浸透しているため、堅実に事業を進めている。その文化に根ざした経営判断がビジネスの動向を的確に読み取り、リーマン・ショックの影響も軽微で済んだ。その結果、リーマン・ショック以降でも業績を伸ばした外資金融の中では唯一の企業と言っても過言ではない。そんな背景もあって「売上を上げる人の意見のみが尊重される」のではなく、共にビジネスを支える人の意見も尊重される風土が育っているのだとか。だか

らいろんなケースで社員がフラットに見えて、筋道の立った、建設的な意見が採用される組織になっているそうだ。

「一緒に道具を作りながら会社の成長を担ってほしい」と考えられる人材を求む

金融業界、そしてパークレイズ・キャピタルのインターンシップに臨む学生には、どんな気持ちを持ってほしいのか。鶴氏は次のように話している。

「インターンシップは、投資銀行の仕組みの一部を間近で見られる減多にない機会。参加された方たちが最終的にほかの業界・企業に行ったとしても、『日本のお金はこういう風に動いている』ということとを多少でも頭に残していただければと思います。

また、パークレイズ・キャピタルは世界でかなりのシェアを持っているとは言え投資銀行としては後発ですから、会社の成長を共に担っていく人が必要です。「道具がないとできません」ではなくて、「これをするためにこういう道具を作ってはどうか」と考えられる柔軟な発想力を持った人と一緒にやっていきたいのです。

そういう会社の状況を感じていただくことで、私たちの会社をより深く理解していただくことにつながっていくのではないかと考えています」

理系学生へのメッセージ

「理系だから」「文系だから」というのは採用で意識していません。が、理系の学生さんは計算力に長けて、物事を順序立てて考える力が強く、金融の仕事に向いているのではないのでしょうか。実際、理系出身で活躍している先輩社員は数多くいます。

パークレイズ・キャピタルでは、トレーニングはもちろん、営業やサポートの部門でも数字に強く論理的なことが求められます。またテクノロジー部門では、社内で使うシステムの自社開発もしています。

このように、理系の方が活躍できる部門が数多くありますので、まずは夏のサマー・セッション、サマー・インターンシップ・プログラムに是非ご参加ください。



パークレイズ・サービス・ジャパン・リミテッド
人事部 人事部長
鶴 尚美 (つる・なおみ)